



『安全なお産, 安心なお産 「つながり」で築く, 壊れない医療』

評者・多田 裕 東邦大学名誉教授

「**周**産期医療の崩壊」が進行し、「産む場所がない」ことが深刻な社会問題になっている。

著者の河合蘭さんはカメラマンであったが、自身の出産の経験とベテラン産婆の取材を機に、産む側の視点から妊娠分娩の扱いの変化や、女性として満足できるお産について執筆してきたライターである。同時にネットワーク「REBORN」の創設や1000人以上の妊婦を集める「いいお産の日」の主催など、医療関係者と女性、家族の対等な交流を目指した活動をしてきている。

本書は周産期医療の進歩に伴う産科や新生児科の医療の変化とその成果による予後の改善について、多くの医師、助産師への取材と豊富な資料と文献に基づいて詳細に紹介し、最新の周産期医療を理解するうえでの貴重な書物となっている。

しかし、本書の特色はそれだけではなく、お産に対する社会の考え方や取り扱いがどのように変化してきたかを、産む女性が何を考え、何を求めてきたかを通じて明らかにし、周産期医療を受ける側の立場から、周産期医療の現状と今後について紹介している点である。

明治時代の近代的な産婆制度の導入から始まり、戦後の施設分娩に至る安全性の向上への努力は、ともすれば医療を提供する側が良かれと思う医療を押しつける結果となり、産む側の気持ちを尊重する点に欠けることが生じた。さら

お産の現状を理解し, 今後の 周産期医療の展望を探る1冊



河合 蘭 著

定価 1680 円(本体 1600 円+税 5%)

四六判/岩波書店/2009 年

に近年の産科医療では安全性を尊重するあまり、帝王切開が選択され、骨盤位分娩や鉗子分娩などの重要な産科技術が失われていく現状も、経験豊かなベテランの医師たちへの取材から明らかにしている。

このような産科医療の傾向には、医療を受ける女性側の周産期医療に関する理解の欠如によるところもあるとし、正しい知識を持ったうえで「安全なお産, 安心なお産」を求めるための情報を提供している。

少子化をさらに加速させる周産期医療の崩壊を防ぐために、行政や医療側が取り組んでいる種々の改善策についても紹介し

ているが、医療を受ける側も医療情勢を理解して無理な要求を控え、「つながり」で築く、壊れない医療を実現することが必要であるとして、これからの周産期医療の改革の道を示している。

このように本書は、医療担当者の記述ではなく専門に偏ってしまう周産期医療の全体像を、医療者の本音と妊婦の気持ちを含めて紹介しており、わが国の医療全般が抱える問題点の解決への手がかりも与えている。

本書は医療関係者のみならず、これからお産をする人や周産期医療に関心のある一般の人にも読んでもらいたい、なかでも妊娠・出産する女性の希望を理解し支援する立場にある助産師には、ぜひ読んで今後の活動に生かしてもらいたい書である。